

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：30127

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K12195

研究課題名(和文)医療ビッグデータ時代における看護の「見える化」推進eラーニングシステムの開発

研究課題名(英文)Development of the "promotion e-learning system to see" of the nursing in the medical big data era

研究代表者

伊津美 孝子 (IZUMI, Takako)

日本医療大学・保健医療学部・教授

研究者番号：20467369

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：医療ビッグデータ時代における看護の「見える化」推進eラーニングシステムの開発を目的とし、自施設以外の医療関係施設及び教育機関等、異なった施設から提供された発表済みのPPT(Power Point)を動画教材化し、その研究成果を臨床で実践活用できる仕組みの構築を試みた。

しかし、コロナ感染により臨床での研究遂行が困難となり、システムの構築完成までには至っていない。現段階における本システムの活用結果、情報共有の一層の深化が期待できる、経験知が様々なスタッフが多く、今後このようなシステムが活用されると医療現場ではスキルアップに繋がる、新たな学びになりこのような共有はありがたい等の意見が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究の意義として、本システムの構築により、看護上の様々な課題が研究を通して一個人に留まらず、広く共有や活用され問題解決の糸口やその機会を得ることができる。また、学会発表後の研究成果が一時的な発表のみに留まらず、臨床での実践活用が期待できる。そして、その仕組みを活用することにより看護職員の課題解決能力や情報活用力の向上が期待できる。さらに、問題解決へのアクションは、医療・看護サービスを向上させ、患者、スタッフの満足度の向上に繋がる。そして、モデル化した課題解決の仕組みは、単一組織にとどまらずシームレスな異なった施設との連携を実現可能にし、看護の発展に寄与できると考える。

研究成果の概要(英文)：With the aim of developing of the "promotion e-learning system to see" of nursing in the era of medical big data, an attempt was made to create a system that would enable the implementation of research results in clinical practice by converting presentation PPT(PowerPoint) provided by various institutions, including medical institutions and educational institutions outside their own institutions, into video teaching materials. However, this system has not yet been completed due to difficulties in implementing research in clinical practice due to COVID-19. As a result of using the system at the current stage, various opinions were sought "it is expected that the exchange of information will deepen further, there are many staff with different experiences and knowledge, so a system will help them with improving their skills of medical staff, and this type of exchange is valued as a new learning opportunity" Opinions were sought.

研究分野：基礎看護学

キーワード：eラーニングシステム 動画教材 研究成果の活用 問題解決能力 情報共有 看護の見える化

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

臨床現場では、研究活動が活発に行われ、病院施設内外での発表の機会も増えてきた一方で、一旦発表されると、その後、その研究はその発表の場で留まり、研究成果の活用は希少であると報告されている。また、病院施設内においても誰がどのような研究発表をしているのか、発表者についても、関係者以外の認知度は高くないケースは多々あるといえる。

本研究では、看護職員の病院施設内外での発表済みの PPT (Power Point) や他施設から提供されたものを動画教材化し、研究成果を臨床に活用できる仕組みの構築を目的とした。本システムを活用することにより、看護上の課題共有や解決、看護実践への活用に繋がることを期待するものである。自施設、自部門、自部署のみならず異なった施設やなどで情報を共有することができれば、さらに新たな学びや研究成果の実践での活用が拡大し、看護の質向上に寄与できると考える。

2. 研究の目的

本研究では、急速な情報化に伴う医療のビッグデータ時代に向けて自施設、自部署だけでなく、文化の異なる複数施設までネットワークを拡大し他者と共有・協同し、看護の「見える化」を推進することで看護研究の成果を実践活用できるシステムの構築を目的とする。そのために異施設間での SNS (Social Networking Service) 上での活発なディスカッションを促進できるように仕組み (機能 および人的な支援) を併せ持つ e ラーニングシステムを構築する。

3. 研究の方法

- 1) 対象者：研究の主旨、方法を理解し、研究協力に同意を得ることができた病院施設に勤務する看護職員、院内外の医療関係施設、教育機関の研究者
- 2) 方法：内外で学会発表済みの PPT に顔や音声を入れて動画教材化したものを YouTube にアップし、さらに専用ホームページ (看護のお宝発見!! - 研究成果活用推進プロジェクト) にアップする。
ホームページは以下のようにした。
 - (1) 視聴ページ 動画教材視聴クリック (YouTube 内には書き込み不要)
 - (2) 視聴後、視聴ページの動画下に記載事項を書き込み、送信ボタンを押す。
 - (3) 動画教材視聴後に、属性 (名前、所属部署、看護職経験年数、連絡先は任意)、発表内容に関する質問、感想などを直接記載してもらう。発表者は質問に対して返信を行い Web 上でディスカッションを行う。
研究成果の活用について自由記述
本システムに関する感想、意見、提案等。
外部からの提供された動画教材は URL 又は QR コードを知っている人のみ (研究協力者) が視聴可能とした。院内の看護職員からの教材提供は看護部を通して募集した。また、提供施設のみが視聴可能なプラットフォームをホームページ内に制作し、研究協力施設ごとに視聴制限をかける事とした。
- 3) 分析：自由記述内容分析
調査期間 2022 年 11 月 ~ 2023 年 2 月末

4. 研究成果

研究協力施設は 2 施設であった。病床規模数は、500 ~ 600 床、50 ~ 100 床であった。教材については、臨床の学習ニーズに沿い、在宅看護 (2022 年 12 月発表) 2 題、臨床看護 (看護管理) 1 題について動画教材を制作した。

3 つの動画教材の視聴者は、視聴期間 2023 年 1 月中旬 ~ 2 月末までの期間 15 名であった。在宅看護については 11 名の看護師が視聴していた。属性については、任意とした。

属性についての記載はみられなかった。発表者へのコメントは 11 名全員が記載していた。研究内容に関する質問は 1 名のみであったが全員が研究内容に関する具体的な感想を記載していた。研究成果の実践への活用については、11 名中 5 名が「今後研究結果を参考に実践していきたい」と前向きな記述をしていた。本システムについて、「病棟でも取り入れられそうな取り組みだと思う」「情報共有の一層の深化が期待できる」「このシステムは参考になり大変興味深い」「経験知が様々なスタッフが多く、今後このようなシステムが活用されれば医療の現場ではスキルアップに繋がられる」「新たな学びになった」「このような共有はありがたい」等、ポジティブな意見が得られた。しかし、視聴期間が短かったことや研究方法の説明が不十分なことも要因と考えられ、視聴者数が 15 名と少ない結果となった。

他施設から提供された教材の視聴は出来たが、施設内の看護部からの教材の提供は 0 であった。これは、看護師自身の他者からの評価を受けるのではないかという自信のなさもあると考えられる。本研究では、ホームページ上に個人情報の観点から病院施設ごとに入

ることができるプラットフォームを制作する予定であったが、コロナ禍における臨床研究の実施が困難な時期も多く、本格的に稼働できた調査期間が非常に短く制作は困難であった。

今後の課題として、関係学会などを通して、本システムの紹介を行い、より多くの医療関係者に広報活動を行う。施設内の看護職員の協力を得るために直接施設に出向き、研究協力依頼する。コロナ禍により研究遂行が遅延、中止、再開を繰り返したが、今後も本研究を継続していく。

<引用文献>

1. 二見朝子, 野口麻衣子, 山本則子 : 看護師のクリティカルシンキングと科学的根拠の利用の関連日本看護科学会誌, Vol. 39, pp261-269, 2019.
2. 井上知美, 中野宏恵, 東知宏, 池原弘展 : 看護研究における臨床看護師が抱える困難, UH CNAS, RINCPC Bulletin Vol.21, 2014.
3. 山澄直美 : 看護職者の教育役割遂行に向けた知の集積, 看護教育研究, Vol27.No2, 2018 .
4. 亀岡智美, 舟島なをみ : 看護実践の卓越性に関係する特性の探索 臨床経験 5 年以上の看護師に焦点を当てて, 国立看護大学校研究紀要, 14 巻 1 号, pp1-10, 2018.
5. 真壁玲子 : 日本における高齢がん患者への看護介入研究の動向と今後の課題, 東北文化学園大学看護学科紀要, 第 8 巻 1 号, pp1-11, 2019.
6. 奥村智志, 小久保知由起 : 精神科看護師の研究成果活用に対する意識に影響する要因, 看護科学研究 vol. 21, pp 41-49, 2023.
7. 相楽有美 : 看護問題への研究成果活用とその課題, 看護教育学研究, Vol28, No2, pp20-21, 2019.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

本研究は、コロナ感染拡大禍の中、研究協力施設の協力中止や施設の教育担当者の人事交代などを繰り返し、研究遅延、中止、再開を繰り返し、2022年度に再開できたが、急速な研究協力施設の人事交代などにより、研究協力施設の開拓の再開により2022年11月から2施設の同意を得て研究を開始した。2023年1月～2月調査を開始と短期間の研究となり、最終的なシステムの構築まで至らなかった。調査データも少なく15名の協力が得られたが、臨床の看護師からは現システム構築への期待は高い結果を示したといえる。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	真嶋 由貴恵 (MAJIMA Yukie) (70285360)	大阪公立大学・大学院情報学研究科 ・教授 (24405)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関